

道府
vs.
市役所

法学部座談会

2018年7月14日(土) 開催

今回の座談会では、法学部生に人気の進路である道庁と札幌市に勤めている法学部OB2名を本学にお招きして、どのような経緯で今の職場で働くことになったのか、仕事の魅力は何かなどを話していただきました。現在3年生で公務員志望の学生2名にも参加してもらい、公務員の仕事について知りたいことを質問してもらいました。道庁OBでもある秦先生が司会です。



中西 雅也 さん



青山 寛明 さん

◎OB

中西 雅也 さん

北海道後志総合振興局保健環境部
社会福祉課
(菅原寧格ゼミ出身)

青山 寛明 さん

札幌市西区保健福祉部
保険年金課
(大滝哲祐ゼミ出身)

◎参加学生

城生野 元 さん

法律学科3年(神元隆賢ゼミ所属)

井田 優花 さん

政治学科3年(千葉華月ゼミ所属)

◎司会

秦 博美 先生

秦 それでは座談会を開催します。最初は、私とOB 2名の方からの自己紹介をしたいと思います。OBの方には、学生時代の話と、どうして今の進路を決めたのかを話してもらえばと思います。まず、私ですが、就職するときに、最終的に道庁と新聞社の記者職のどっちを選ぶかで迷いましたが、新聞記者をやる自信がないという理由で道庁を選びました。35年間道庁職員として働き、その後、本学法学部で勤務することになり今日に至ります。

中西 後志総合振興局保健環境部社会福祉課の中西です。がん対策や感染症対策などを取り扱っている部署で働いています。学生時代は、恥ずかしい話ですが、勉強ができる学生ではありませんでした。その代わり、いろんなことを経験した4年間でした。公務員を目指したきっかけは、最初はなんとなくでしたが、次第に公務員の仕事に興味を持ち始めて、公務員試験を受験することになりました。市役所や国家公務員などいろいろと選択肢がありましたが、市役所のようにずっと同じ場所や地域で勤務することが自分の性格には合わなかったので、道内のいろいろな地域に転勤がある道庁を選び今に至ります。

青山 青山といいます。札幌市西区保健福祉部保険年金課で昨年4月から働き始めて、今年で2年目になります。国民健康保険や介護保険を取り扱う仕事をしています。小学校くらいのときから漠然と公務員になりたいと考えていました。大学を選ぶにあたって、北海学園大学が公務員試験に力を入れていることを知り、法学部に入学しました。1年生の頃から公務員試験を意識して勉強しました。3年生の後半から就職活動をするにあたり、民間企業も面白そうだと思ったら、途中まで民間企業の就活もしていました。ですが、広くいろいろな人と関わるような仕事がしたいと考えて、公務員試験のみを受験することに決めました。札幌市以外にも、国家一般職などに最終合格しました。幅広い分野でいろいろな仕事が経験できると考えて、札幌市を選択して今に至ります。

秦 ありがとうございました。今度は、学生のお二人から自己紹介と質問をしてもらいたいと思います。城生野さんからお願いします。

城生野 法律学科3年の城生野です。さっそくですが、お二人は今現在具体的にどんなお仕事をされているのでしょうか。

中西 国と市町村の間を調整する中間管理職みたいな仕事をしていると思います。例えば、僕が今携っている社会福祉施設特別養護老人ホームですと、そういう施設を建設するというような際に、建設補助金を受けたいとなったときに、国と道との間で調整して、どのような仕組みでお金を出すのが一番良いのかを検討したりしています。

青山 区役所の仕事は、直接市民の方にサービスを行う仕事といえます。今の部署での仕事は、窓口に来られた市民の方に、保険料納付の説明、その変更手続や、保険証の交付を行っています。

井田 政治学科3年の井田です。中西さんのお話しでは学生時代にいろいろな経験をされたとのことですが、その経験がどのように活かされたのでしょうか。

道庁 VS. 市役所

中西 大学時代は、いろんな人とできるだけ関わるようにしていました。そうした経験が、苦手なタイプの人でも関係性を築くことができることになったことに、活かされたと思います。

秦 今の経験は、具体的に大学時代のどのような活動から得られたものでしょうか。

中西 デパートのエレベーターボーイや、家電量販店でプリントを売ったりという経験などから得られたと思います。

城生野 サークル活動は何をされていたのですか。

中西 旅行サークルに所属していました。しかし、サークルでどこかに行ったということはあまりなかったです。メンバーで集まって一緒に酒を飲んだり、他愛ない話をしていました。

井田 公務員に実際なるまでの公務員の仕事に対するイメージと、実際に公務員になって働き始めてからのイメージを教えていただきたいです。

青山 公務員になる前は、1日中椅子に座ってパソコンで仕事しているイメージでした。働き始めてからは、何かを実行するのが仕事なので、パソコンに限らず、どのような仕事でもスピードを求められる仕事というイメージに変わりました。

秦 大学の講義で何か役に立ったことは？

青山 法律の条文の読み方や、ゼミで判例研究をしていたので、長文を読む力が養われたことが現在の仕事で役に立っていると思います。

中西 いろんな講義を受ける中で読むことに免疫がつきました。特に条文の「ただし書」が解釈で重要であることに、働き始めてから改めて



いという話を聞いたので、実際はどうなのかと思って。

青山 今の自分の部署は長時間労働はありませんが、保険証の一斉更新など短期間で仕事をしなければならない時期は、どうしても長時間労働になってしまいます。しかし、一時的に忙しい時期があるだけで、通常は定時で仕事が終わる場合がほとんどです。

井田 学生時代にもっとしておけば良かったことがありますか。

青山 自分の学生時代はコンビニでしか仕事をしなかったので、もっといろいろな仕事を経

仕事をしたときに役立つと思うので、いろんな仕事を経験しながら仕事をしていきたいです。

青山 今の仕事を一所懸命に行い、仕事が変わっても自分でそれをマスターしていくれば、全く知らない分野でも精通していくと思うので、いろいろな仕事を経験したいです。

秦 道庁や札幌市に北海学園大学出身者の同窓会のようなものがあると聞きました。

青山 あります。去年参加して、今年も参加予定です。

中西 ありますが、まだ参加したことはありません。

秦 道庁と札幌市の仕事の魅力はどういうところでしょうか。

中西 転勤がありますが、それをあまり嫌だとは思って欲しくありません。むしろ、いろいろな地域で仕事をして、そこでの課題に取り組むことにより、どのように北海道を良くしていくのかを考えられるのが魅力だと思ってほしいです。

青山 市民の方に直接奉仕できる機会が多いのが魅力だと思います。

秦 最後に学生さんから、今日の先輩お二人の話を聞いての感想で締めくりたいと思います。

城生野 公務員を目指して勉強しています。お二人の話を聞いて、公務員になりたい気持ちがより強まりました。ありがとうございました。

井田 札幌市の仕事の魅力や、札幌市以外の場所で働くことの魅力を実際に聞けて、新たな視点を得ることができました。ありがとうございました。



司会: 秦 博美 先生



井田 優花 さん



城生野 元 さん

気づきました。そういう意味で、法学部で勉強して良かったと思います。

城生野 答えにくいかもしれません、札幌市が少しブラック臭味だという噂を聞いたのですが。

一同 ははは（笑）。

秦 ブラックってどういう意味ですか。

城生野 時間外労働が多くて、忙しい人が多

験しておけば良かったと思います。そうすれば、もっと今の仕事に活かせたのではないかと思います。

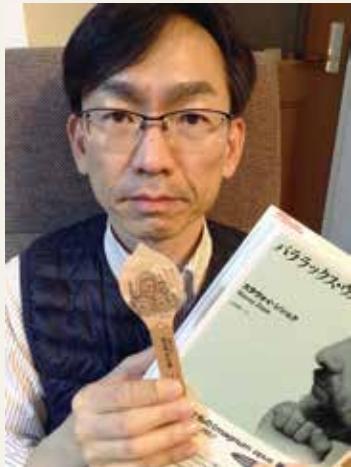
秦 お二人の話だと、ずっと同じ場所や部署での仕事はあまり好まないという印象を受けますが、そうなのでしょうか。

中西 何年かごとに仕事が変わった方が新しい知識も増えますし、その知識がまた同じような

川谷先生 追悼

法学部法律学科の川谷茂樹教授は、病氣療養中のところ2018年2月12日に逝去されました。川谷先生は、2005年4月に倫理学担当教員として本学に着任されました。ご専門の倫理学、とりわけカント哲学に依拠したスポーツ倫理学の分野の第一人者として、多くの研究業績を遺されると同時に、学生思いの先生として一貫して学生の教育と指導とに情熱を傾けてこられました。川谷先生は私たち教員、学生、卒業生に多くの思い出を残してゆかれました。その一端を共有いたしたく、とくに交流の深かった方々にご寄稿いただきました。在りし日を偲びつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。

カエルのおじさん 北原 博（法学部 教授）



川谷さんとは10年ほど読書会を続けてきました。直接の研究テーマではないニーチェをドイツ語で読むこの読書会を川谷さんも楽しみにしてくれていたようです。コーヒーを飲みお菓子を食べながら、仕事（学部や授業のこと、私生活のことなどのおしゃべり）で始まり、後半で一気

に2ページほど読んでおしまい。近隣の研究室の先生方には、コーヒーの香りを漂わせ、笑い声が聞こえてくるという不思議な時間だったと思います。

テキストの内容についての川谷さんのコメントは的確でとても分かりやすく、納得させるものでした。専門のカントはもちろん、他の思想家についても自分の言葉で説明してくれるのです。倫理学の諸問題をきちんと自分で考え抜いていた人だからこそ、（趣味とも交差する）スポーツの倫理のような応用もできたのだと思います。いつもこの人は本物だと思ったものです。そして最近はスラヴォイ・ジジェクの話をよくしていました。ジジェクの哲学との出会いによって、川谷さんは何かを見つけたようでした。聞いている私にも川谷さんの研究が大きく開花する予感がしました。

おしゃべりも楽しい思い出です。あるとき川谷さんが近所の公園でカエルの餌をとっていて、たくさんのカエルを飼っていることを知った小学生たちから尊敬の念を込めて「カエルのおじさ

ん」と呼ばれたと楽しそうに話していました。大学教授という肩書ではなく素の川谷さん的人間性あってこそ小学生からも尊敬されたのでしょう。以来、我が家では尊敬と親愛の情を込めて川谷さんを「カエルのおじさん」と呼んでいます。

またあるときは、『偶像の黄昏』を読みながら、これニーチェが今の俺らより若い時に書いたんだよ、やってられないよ、といったようなことを冗談交じりで語っていました。そう、私たちはすでにニーチェが狂気に陥った時の年齢を超えてしまっていたのです。ニーチェは早熟でしたが、川谷さんはまさにこれから円熟を迎えるところでした。「カエルのおじさん」は神様に愛され過ぎてあまりに早く傍らに呼ばれてしまったのかもしれない。

川谷さんが亡くなつてひと月もしないうちに、私は在外研修で日本を離れました。時にはしばらく顔を合わせることもないゆるい関係でしたから、日本に戻ったら「あれ？ 北原さん何してるの？」と川谷さんが笑顔で立っているような気がしてなりません。

川谷先生との時間 藤田 優美恵（法律学科2年）

この文章を寄せるにあたって、今現在の自分の想いと向き合わなければならず、とても長い時間がかかりましたが、学生の一目線から見た川谷先生の思い出をお伝えします。

先生は私のたった1人の師匠でした。私のことを「弟子見習い」としてご指導していただき、後にも先にも師匠と呼べる人はいないと思っています。

私は、倫理学は、高校生の時より深く学びたいと考えていました。また、先生の基礎ゼミ生でした。前期の定期試験はどのテストよりも時間をかけて取り組みました。最難なしに、1位を取ったと、とても出来がよかったと褒めていただきました。

テストの結果や、私の、継続して学びたいという意志などから、先生がこの定期試験後の夏休み期間に創られた哲学・倫理学履修プログラ

ムに誘っていただき、プログラム生第1号となりました。マンツーマンのプログラムでした。

半年という短い間でしたが、講義だけでは何うことの出来ない先生の姿がありました。

何事にも熱意のある方でした。

学生の問い合わせ、気持ちを一心に受け止めてくれる方でした。

研究室にはウイスキーが棚いっぱいに置いてありました。

研究室に足を運べば暖かいコーヒーをいれてくれました。

結婚式には絶対招待しますので！なんて冗談も言つたことがありました。

卒業したらウイスキーを飲む約束をしました。

真面目に先生の元に通っていたら、など、いつもいつも、沢山のことをふとした時に思い出します。

4月初めの講義から、研究室の中でも、何度も先生は、大学時代は自由な主体として生まれ変わる最後のチャンスだと言っていました。

10月頃、私がだらけていた時、先生にお説教をされました。本当はお説教なんてやりたくないんだけど、しなきゃいけないからと、「説教」という題名の、A4用紙3枚にまとめたプリントを渡されました。生真面目だなあ…と思いました（これから叱られる身でしたが）。

お説教プリントの中で、何かと言い訳をつけてやらない人（わたし）に対する、とても心を打たれた文章がありましたので、ご紹介します。

「意志(will)」、「やる」という意志についてです。やるか、やらないか。「決めて断つ」という決断は、「意志」がある人は必ずやります。「やる気」と同じものだと考える人は多いですが、

ある「研究」のこと

田村 卓哉（経営学部 教授）

誠に僭越かつ不適格ですが、樽見先生のご指名により、某「研究会」の一員として寄稿いたします。この集まりは、ある年の某学内共同業務が起源です。過酷な作業が一段落し、某所で中間慰労会をしたのですが、その場に大ブリテン島北部及び周辺諸島を主産地とする某飲料があり、川谷さんがその中の1つ“Lagavulin”に興味を持ったわけです。

みんなが知らない間に、彼は猛然と「研究」を始めました。彼の地の全蒸留所が記載された地図を入手し、その全てを吟味するという壮大な「研究計画」を聞いた時は、全員呆れました。「初めて趣味らしい趣味が出来た」と彼は言っていましたが、真に受けたメンバーはないと思います。かなりの凝り性でしたので。その後、彼の「研究発表」を聴き、実際に「おこぼれに与る」楽しい集まりが不定期に行われるようになりました。中には、「講釈は短めにして、早く飲ませてほしい」不届きな「研究員」もいるのですが、寛容で忍耐強い彼は、産地の特徴、銘柄の語源、製法と熟成法の詳細、夏

目漱石の嗜好に関する仮説まで、実に多彩な「研究成果」を披露してくれました。

彼の名誉のために記しますが、この「研究」は彼の本来の研究にも寄与しています。当時、彼は、例の「キリギリス先生」の翻訳に悪戦苦闘していたのですが、その原文中にある単語について、「こちらの「研究」のおかげで思わぬ誤訳を免れた」と喜んでいました。同時に「翻訳は本当に怖い」とも（なにせ、“Grasshopper”1語に関する訳注だけで2ページに亘りますものね）。とにかく、「研究」から研究まで、自由闊達に話が出来る貴重な集まりなのですが、余人を以て代え難い「主席研究員」を失ってしまいました。

昨年末、本来は彼も出席予定だった「忘年研究会」のために、不調をおして彼が届けてくれた「材料」の1つに“Arran”がありました。わざわざ無理をしなくてもよかったのに…と恐縮したのが、私が彼と交わした最後の会話になりました。いつものように、レジュメまで用意してくれて、最後まで本当に律儀な男でした。そのボ



トルのラベルには、スコットランドの国民的詩人 Robert Burns の肖像が載っています。九州で生まれ、京都で学び、北国で一生を終えた彼にとって、この北の地が少しでも良きものであったことを願い、3月の追悼研究会で Burns の詩を紹介しましたので、その一節を記します。

実は、ごく身近にいる院生さんが、昔からの川谷ファンだったことが判明しました。学部受験前に見た 2009 年度版の大学案内に彼が載っていて、その時から彼の講義に期待していたそうです。彼の死を告知した時の彼女の様子を見ていて、ある本のタイトルを思い出しました。「あなたともっと話したかった」（柏木哲夫, 2003）。

我が心はハイランドにあり、我何處へ行くも。
いざさらばハイランドよ、いざさらば北の國よ。

（中村為治訳, 1928 岩波文庫）

「やる気」は幻想に過ぎない。やるべきことをやる時に、やる気なんてなくていいし、そのやる気があろうがなかろうが、やる。これが意志です。

人間がもつことのできる最も崇高なものです。この単純極まりない意志だけが、自分の未来、愛する人の未来、世界の未来を切り開くことができます。

「ちょっとくらい怠けても大目にみてくれるんだろうな」という気持ちではなく、「もしかしたら大目に見てくれるかもしれないけどそれに甘えずいつも以上にちゃんとやろう」という位のプライド（矜持）を持ってください。そうやって一生懸命自分を律しようとしているさま、その美しさを指して、人は「けなげ」と呼ぶのです。

今現在、私はこうして頂いた文章や、教えていただいたことが今やれているのか自分に問



うことがよくあります。先生より与えられた、やる、という「意志」があることを、大人になっても忘れないように、立派な弟子である（見習いですが…）と誇れるような「プライド」を持ち続けられるように、また多くの思い出や言葉を糧に、一生懸命自分を律することができるよう、

先生が見守ってくださっていればと思います。長くなってしまいましたが、今回の法学部報に寄稿できることを大変嬉しく思い、終わります。

川谷先生、ありがとうございました。

研究室訪問



井上 瞳

何を勉強したらいいの？

高校時代、受験競争（といっても田舎の高校なので、今考えるとたいたい競争は無かつたのですが）に嫌気がさして不登校気味になった私は、学校をサボって母と温泉に行くか、友人と街に遊びに行くか、家で興味のある本を読むか、そんな生活をしていました。担任の先生から携帯に「どこにいるの？」と電話がくることも珍しくなく、当時の通信簿は「出席日数が限界です」ということばかり書かれしていました。

その頃の私の関心事は「（暗記中心の）受験勉強ではなく、「本当の」勉強がしたい！」というものでした。図書館では受験勉強そっちのけで、刑法学者である団藤重光の『死刑廃止論』を読んだり、長らく日本の死刑の適用基準となる「永山基準」で有名な永山則夫の『無知の涙』を読んだりしていました。

大学に入れば「本当の」学問ができるだろうという漠然とした期待があったのだと思います。とはいえ、「本当の学問」とは何かということを特に考えるでもなく、受験勉強をしたくないあまりに先生に相談した指定校推薦も出席不足で無理と言われ、観念して大学受験、進学したものの、1年生の時点で早くも大学を辞めたいと考えていました。「何かを勉強したい」と思ながら、「何を勉強したいのか」が見えなかつたのだと思います。

社会を科学するということ

「社会科学」なるものとの出会い

そんなときに出会ったのが、大塚久雄の『社会科学の方法～ヴェーバーとマルクス～』でした。大塚久雄は経済学者ですが、政治学の丸山眞男と並び、専門領域を超えて戦後日本の社会科学に影響を与えた人物です。当時の私に強い印象を残したのは、「社会科学とは、地図を描く作業である」という大塚の言葉でした。国内外の様々な事柄に関心があったものの、それらがなぜ生じているのか、また個別に発生しているように見える問題がどう繋がっているのか。このような問い合わせを抱きながらそれを言語化できずにいた当時の私にとって、大塚の本は、複雑な世界を読み解くための一つの視点を提供してくれるものでした。

森の中にいれば、近くの木は見えるけれど、自分が森のどこにいるのか、またその森がどこにあるのかはわからない。けれども、地図を描くことで等高線がわかり、社会の全体像が見えてくる。そこで初めて個々の問題群を体系的に把握することができ、なぜこの森の木が枯れているのかといった、現に現れている問題の背景を理解することができる。私がやりたかったのは社会科学なんだ！と思った瞬間でした。

研究するということ

しかし、「社会を科学する」ということはあまりにも抽象的で、「では何を学べばよいのか？」というと簡単に答えが見つかったわけではありません。そのため、しばらくは相変わらず、鍋サークルで鍋を囲んだり、地元の青森では放送されていないフジテレビに夢中になったり、（今は震災によって大きく変わってしまった）松島や荒浜の海岸で遊んだりといった日々を過ごしていました。

そんなときに关心を持ったのが、政治系の授業やゼミ、なかでも国際政治学でした。その背景には、2003年のイラク戦争や、「グローバリゼーション」「国家の退場」といった言葉の流行、という当時の文脈があったように思います。とく

に、「他国の内政には干渉しない」という「内政不干渉原則」という国際規範が長らく存在してきた国際社会において、「民主主義」や「人権」という、より新しい国際規範によって戦争が正当化される過程に关心を持ち、研究したいと考えるようになりました。

「社会を科学することへの疑問

ところが、大学院進学以降、今度は「（実証的な）社会科学」そのものに疑問を抱くようになります。一口に「実証」といっても、歴史研究と理論研究とでは、その考え方や方法は大きく違います。私は理論研究にあたりますが、理論研究は、現実にある様々な事象を説明可能にする一方で、それに当てはまらない（もしかしたらとても大切な）事象を捨象することになるのではないか、という疑問が生まれました。これは同時に、大塚流の「社会科学」に対する疑問でもありました。社会を俯瞰的に見ることは、森の中の一本の木や、そこに生きるカブトムシの生一すなわち、人間一人ひとりの生一を見えなくさせてしまうのではないだろうか。そして、私がやりたい研究とは、社会を体系的に理解すると同時に、その社会に生きる一人ひとりの生に向き合うことではないだろうか。それは、自分が社会に生きる一人の人間である以上、「俯瞰的な立場」からその社会を科学「できる」と考えること自体、ある種の傲慢なのではないか、という自分自身への疑問でもありました。

その結果、修士課程で研究テーマを大きく変え、韓国という一つの地域に絞って研究するようになりました。もちろん、それで疑問が解消されたわけではなく、今度は自分がそのテーマ（地域）を研究する意味についても問わざるを得なくなっています。研究は、それに向き合う自分の視点に縛られているものだからこそ、常に自分の立ち位置を問い合わせる必要がある。今なお、この延長線上の問題意識を抱きつつ、試行錯誤の最中です。



高橋 義彦

政治思想史というと小難しい感じがするかと思いますが、ざっくりいえば人類が「政治」という営みをどのように考えてきたのかを辿っていく学問です。

政治は政治家や官僚がどこか遠いところでやっていることと考えてしまいがちですが、人間が二人集まればそこに政治が始まるといわれるよう、教室にだって、サークルにだって、職場にだって、家族の中にさえも政治はあります。一人では生きていくことのできない人類が共同生活を始めたことが政治の始まりとすれば、政治の歴史は人類の歴史と同じく古いといえるんですね。世界史を辿りながら、さまざまな時代のさまざまな国の人々の政治家や思想家の政治論を読み解いていく、これが政治思想史という学問の基本です。

これだとまだ小難しい感じがするかと思いますが、もっとざっくりいうと、ぼくは政治思想史という学問は、ある意味落語のようなものだと考えています。ぼくは落語が大好きで、落語についての古書やCDを蒐集し、寄席にもよく通っています。

政治思想史とは落語である？

古典落語というのは、江戸・明治時代からさまざまな演者により語りつがれてきたものです。つまり古典であるテキストはすでに存在していて、それをどう語るかというのが噺家の力量が問われるところであり、聴き手の期待するところなのです。同じ噺であったとしても、古今亭志ん生と三遊亭円生と林家正蔵を聴き比べると受ける印象が全く違う、ここに落語の面白みがあります。

政治思想史においても、わたしたちには学ぶべき対象としてすでに古典が存在しています。プラトンの『国家』、アウグスティヌスの『神の国』、ホップズの『リヴァイアサン』、ルソーの『社会契約論』、ウェーバーの『職業としての政治』などなど、こうしたテキストは日本でも世界でも、「政治思想史」と名のつく講義では必ず言及されると思います。政治思想史を学ぶということは、噺家と同じように、そうしたすでに存在するテキストをよく読んで自分なりに解釈し、その面白みを伝えるということにあると思うんですね。つまりぼくは噺家として講義を聞いてくれる学生の皆さんに、その古典の魅力を語りついでいかなくてはならないわけです。加えて教える側のぼくだけでなく、学生の皆さんも講義を通じてあるいはそうしたテキストに自ら触れることで、今度は解釈する側として噺家と同じ作業をすることになります。

古典を読み継ぎ、解釈し続ける、そして時代に応じて新しい読み方を提示する、こうした営みにおいて政治思想史を学ぶということは落語に通じる点があると思うんですよね。しかもこれは何も落語に限らず、音楽でも一緒です。ベートーヴェンの第九を演奏するにしても、テキスト=楽譜をどう読み込んでどう解釈するかが大事ですから。フルトヴェングラーとカラヤンの指揮では同じベートーヴェンが全く異なって聴こえます。優れた指揮者の音楽論というのは思想史の方法論として読むことができるのです。

ぼくの講義が落語のように面白いか、すばらしい音色を奏でるかどうかは保証できませんが、学生の皆さんには政治思想史を学ぶ、古典を読むということをあまり難しく考えずに気軽に受

講してほしいと思っています。そして古典とされているテキストを「読む」ということの楽しさをわかってもらえると嬉しいですね。

そもそも政治思想史とは、という大きな話になってしましましたので、次にぼくの狭い意味での専門について少しお話を。政治思想史を専門にしているといっても、古代ギリシアから始まる2000年以上の歴史すべての専門家というわけにはいきません。その中でぼくが専門にしているのは20世紀におけるファシズムの政治理想、特にオーストリア・ファシズムの政治理想です。

1930年代に入るとオーストリアでもドイツや日本のようにファシズム政権ができるのですが、この政権には面白い特徴があって「反ナチス」のファシズム政権なんですね。ファシズムというと日独伊三国同盟というように一枚岩な感じがしますが、オーストリア・ファシズムはナチスに「反対」するファシズムだったわけです。その証拠に指導者だったドルフスという人物はナチスによって暗殺され、そのうえ最終的にオーストリアはヒトラーによって無理やりドイツに併合されてしまいます。同じドイツ語を公用語とし、同じようにファシズム政権を樹立しながらドイツとオーストリアでは何が違うのか、なぜオーストリアのファシズムはナチズムに反対したのか、というのは非常に興味深い問題です。

このように政治思想史というのは、古代から現代に至るさまざまな古典や、世界史・日本史のさまざまな歴史的出来事を対象としています。その上、古典を読むといっても、狭い意味での「政治家」、「政治学者」が書いたものに限定されることなく、哲学者や神学者、経済学者、法学者、はたまた文学者まで研究対象になります（そもそもぼく自身の博士論文の研究対象がカール・クラウスというオーストリアの作家です）。ですので、政治だけでなく、歴史や文化、宗教、文学などさまざまな分野に興味のある方には、ぜひ政治思想史の門を叩いてほしいですね。



べにこ りょうた
紅粉 亮太 さん
(株式会社電通北海道勤務)

——電通東京から電通北海道に移籍されたばかりとか。札幌に戻られた理由は?

はい、昨年の暮れに念願かなって電通本社（株式会社電通）から電通北海道に転籍することができました。いずれ札幌に戻って北海道のために働く、は法学部生の頃からずっと思い描いてきた夢だったのです。電通東京には7千人の社員がいたのがこちらは150人。スケール感の違いに始め戸惑い

もあったのですが、プロジェクトを丸ごと任されている、という日々の実感がこちらで働く醍醐味ですね。現在は、例えば、札幌に本社を置く道内企業をクライアントに、アジア進出のお手伝いをしています。HokkaidoやSapporoはすでにアジアでは根強いブランド力をもっていますが、まだまだ伸びしろがあると確信しています。

——電通に入社するに先立って、北海道大学大学院の修士課程に学んでいますよね。こちらのきっかけは?

学園法学部を卒業した2007年当時は就職状況が厳しかったこともあって、自分が社会でバリバリ働くイメージがなかなか掴めないでいました。それで、所属ゼミの樽見（弘紀）先生に相談したら、「親は何をしてるんだ?」と訊かれた。内科医です、と答えたなら、「だったら医学部に入り直しておやじさんのあとを継ぐ、という手もあるね」と（笑）。それはさすがに……、と言ったら、「お父さんに『さらにもう2年スネを齧らせてください』とお願いして大学院に行きなさい」と。素直に従って、当時、樽見ゼミのテーマだった市民メディアの研究を深めようと北大の国際広報メディア・観光学院に進学しました。在学中は、ロバート・キャバ（報道写真家、戦場カメラマン）の仕事に感銘を受けて写真論を学び、一度は新聞記者を志したりしました。

——東京で感じた北海道出身者の強みとは?

それは北海道に育った者が一様にもつ他人に対する優しさ、寛容さではないでしょうか。電通では立場の違う社内外の多くの人たちが一緒にタスクフォ

ースを組んで仕事をする機会が多いのですが、この道民のもつ「優しさ」は、長い目で見れば人を束ねる武器になる、と実感することが多かった。

——いま一番の悩みは?

結果的に、妻と子供を東京・三鷹市の自宅に残した「逆単身赴任」になっていることでしょうか。一番の成長期に長男（4歳）と一緒にいられないのはちょっと寂しいですね。北海道に戻ることを画策していた頃は、妻子も北海道再上陸計画の一部だったのですが、銀行系の業界団体に勤める家内が職場で大出世を果たしまして……。で、「いまは一緒に札幌に行けない」と。人生は予期せぬことの連続です（笑）。でも、いまや格安のLCCがありますので、週末ごとに千歳と成田を元気に往復しています。

——将来の夢、何かありますか?

いつの日か何らかの教育にたずさわる、という夢もないではないです、依然として、人に伝えたい何かを自分自身が吸収する段階ではあります。

——いつの日か学園法学部でも「紅粉広報メディアゼミ」をぜひ! では、次のお友達をご紹介ください。

では、次は現在、すすきのバーを経営している山本順平さんでお願いします。

——ありがとうございました。

(次号に続く)

新任教員のご紹介



高橋 義彦 先生



鹿谷 雄一 先生



岩淵 重広 先生



井上 瞳 先生

慶應義塾大学法学部卒業。慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学。博士（法学）。慶應義塾大学・専修大学・フェリス女学院大学等非常勤講師を経て現職。

大東文化大学法学部政治学科卒業、同大学大学院法学研究科政治学専攻博士後期課程修了、博士（政治学）。この間、タンペレ大学地方自治学科留学。（財）行政管理研究センター研究員、ノースアジア大学准教授などを経て現職。

同志社大学法学部法律学科卒業。同志社大学大学院法学研究科へ進学。日本学術振興会特別研究員（DC）。同志社大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。2018年4月より北海学園大学法学部講師。

東北大学法学部卒業。一橋大学大学院法学研究科博士課程修了。博士（法学）。日本学術振興会特別研究員、オーストラリア国立大学訪問研究員、一橋大学法学部特任講師、日本福祉大学福祉経営学部助教等を経て現職。